

短編小説 二

土師 猛

我輩は犬である

天は犬の上に犬を造らず、犬の下に犬を造らず。という、有名な犬博士の言葉はどうもおかしいと思う。我輩とポチ君の境遇は、日向と日陰のはっきりした生活である。

ポチ君とは、同じペットショップの隣のハウスで三か月過ごした。六月生れの柴犬仲間である。店主からは、お互いに非常に可愛がられ譲渡価格も同じ値が付いていた。

我輩が原山台の山口家の一員となったのは、ポチ君が引取られた一か月後のことであった。山口家では歴史の好きな主人に、幕末の有名人と同名の『龍馬』と命名された。奥さんは我輩の日常生活の面倒を余す所なくみてくれる。学校から帰った二人の子供と戯れ合うのは日課となっている。どうやらペット冥利に尽きる飼い主に引取られたようだ。

高価なドッグフードもそろそろ飽きだしたところだ。

ポチ君と偶然再会したのは、枯葉の舞い落ちる遊歩道を、原山台から庭代台へと主人と散歩していたある日のことだった。柵越しに見るポチ君は、ペットショップ時代の凛々しい面影はなく、弱々しい汚い毛をしていた。ヒモで繋がれていなければ、野良犬と間違うところだった。

お互いの近況を話しているうちに、我輩の状況を聞いたポチ君は恥ずかしそうに野良犬並みの待遇を強いられている現状を泣きながら話した。散歩はほとんどなく、いつもヒモで繋がれたままで、日常の面倒はおろか食事も三回与えられないことも多いという。野良犬には自由があるが自分には自由もない。飼い主に恵まれなかった自分の不幸を散々嘆いていた。『龍馬』と、主人にリードを引かれたのでポチ君と別れ、遊歩道の散歩をはじめた。

途中、薄汚い服を着て髪の毛の乱れている母子の人間に会った。